

もろろ・言葉なし！

★滋賀県 湖東 愛知川
☆茶屋川

「今日はどこから？」

いつもの店で魚券を買い、何時しかその店の軒下で、その日のおおよその時間(場所) 割りを決めるようになっていた。

だいたいいつもは、「御池から行こか？」とか、「神崎橋で分かれよか？」とか、殆ど決まった答えが返って来るが、時々息を呑む答えが返ってくる。

「どうするう？」

「・・・」(この「微妙な間」に・・・)

なんとなく胎動を感じて・・・

「御池？」(御池でエエやる?)

・・・また、「微妙な間」が空く・・・

(もしかして)・・・

「久しぶりに茶屋川に入らへん？」・・・

(やっぱり・・・行くの？・・・あそこ・・・)

「そつやなあ・・・久しぶりに行ってみるか？」

ともうひとりも言う。

八風街道から左にそれ、雨上りの林道を水溜りを避けながらゆっくり進み、久しぶりに見る折戸トンネルを越えて焼野橋の袂に車を止めた。

愛知川上流と言えば、神崎・御池・茶屋の三河川が管轄漁協の遊魚券で竿を出せる。

しかし、この茶屋川だけは何時しか気分が乗らない溪になっていた。

案の定この日もバツとしない・・・ドチビあまこが2匹出ただけだった。

もう少し上流に向かい、そこから分かれる・・・ひとり上流、もう一人は下流・・・私はダメもとで目の前に流れ落ちる名もないチヨロ谷を攻めることにした。

お隣の神崎川はこの手で攻めるとかなりの確率でイワナに御目文字できる。

暫く上がると少し谷が開けて、期待が持てる様になってきた。しかし、肝心のイワナは全く出てこない。更に上がると足元が少し柔らかくなって来て、落ち葉が堆積して腐葉土の様になっている。

「こりゃアカンな！・・・」と思った途端・・・踏み出した右足が膝の上まで地面に吸い込まれた。

咄嗟に手を突いたが、その手も地面をつかめない・・・瞬く間に水が湧いてくる。

どうやら腐葉土が体積した小淵に気がつかず踏み込んだ様だ・・・

「落ち着け・・・」と自分に言い聞かせながら、空いている側の手と沈んでいない足を最寄の木々に絡ませ、どうにか脱出に成功した。

「・・・もうエエわ・・・この川・・・イヤー！」

平常心を取り戻し、バックポケットからポットを出してコーヒーを飲むと、脳裏でフラッシュバックが始まった。

確かこの前来た時も・・・

浅い平瀬ばかりでアタックもなく、河原で休んでいると対岸の林の奥で木々が揺れた。

「何や？」(熊か？・・・いやここは鈴鹿や！・・・熊はおらんはずや・・・鹿か?)

背後は林道まで崖の様になっている・・・咄嗟に手頃な石を持ち身構えた。

大きな咳払いをしても「獣」の様な警戒心もなく大胆にこちらに向かってくる。

現れたのは山菜(草)採りらしき中年の女性だった。

(なんじゃい！・・・オバンか・・・びっくりするやないかあ！)

と手に持った石を背後に投げると、その女性も対岸で私に気がつき、目があった途端に会釈もせず、慌てて背中を向けて髪の毛を直している。

(待てよ！・・・「狐」ちゃうやろなあ？・・・)・・・と薄暗い溪谷に、その素振りに一瞬背筋がゾツとした。

その途端、大きく対岸の木々が揺れて大きな

「狸」が現れた。

「すみません。・・・」と対岸から声を
出すのは、小太りの男だった。

（狸）「ちやうやろなあ？・・・」ともう精神
錯乱寸前！・・・

「どないです？・・・」と釣りの手振り
で対岸の小太り狸が聞いている。

「・・・」無理からに軽く会釈し、無言
で首を横に振った。

「頑張ってください。」と言うが早いか、いき
なり女狐が小太り狸の背中に飛び乗り、狐狸の
夫婦はいつもの日課の如く、下流に去って行っ
た。

（単純に長靴を履いてない奥さんを旦那がお
ぶって川を渡って行っただけなんだが・・・）

・・・「嫌なこと思い出さんとこー」と、
休憩を切り上げて、腐葉土のチヨロ谷を林道め
がけて下り始めた。

程なく、もう少しで林道と言う所で、バスフ
ィッシングのテキサスリグに使用するワームの
様なものが落ちている。

（何や？）と思つてのぞき込むと、その青紫
に怪しく光る大きなワームがいきなり動いた。

（何やこれ！・・・ミニミズの化けモン
やんけ！・・・もしかして蛭の化けモンかあ？・・・）

全身鳥肌が立ち、一瞬硬直した・・・そして
発狂寸前で「ドァー！・・・」と大きな声を上げ
て一直線に駆け降りた。

漸く林道に飛び降りたものの、未だ鳥肌は治
まらない。

素肌の部分を一通り撫で回し、漸く治まると
大きな脱力感に襲われた。

「もう・・・エエわ・・・もう・・・勘弁してよ
お・・・」

後を調べると「シーボルトミニズ」と言う大
ミニズで、このあたりではよく見かけるらしい。

（そんなモン・・・知るかあ！・・・）

■茶屋川へのご案内
もお・・・言葉なし！

「浅い平瀬が比較的多く、木立の下を流れる
暗い溪です。私は余り釣れません。以上」

山本素石の著書にある「茨川」に纏わる話が
大好きで、何度かこの茶屋川に入溪を試みるも
の、魚に出会う確率よりも、平常心が保てな
い確率の方が遥かに高い。

毎回こんな事件が起こる訳ではないが、それ
でも数える程しか入ってないと思つている。

大概、焼野橋あたりで竿を出し、上がったも
又川谷より少し上しか入った事がない。

もうひとつ、気乗りがしない理由として、イ

クラの撒餌釣り（これは御池でも時々見かける
ので、止む無しとしているが）はもとより、刺
網やヤス突きを目にする時がある。

又川谷を少し上がったところで、上流から軽
装の二人組みが降りてきた・・・手には尺に届く
イワナが3匹、ストリンガーに吊るされている。
私に気がつくやと獲物を高々と掲げ、（どう
や！）とばかりに勝利の笑みを浮かべてる。反
対側の手には釣竿に加えて水中眼鏡とヤス・・・
不愉快極まりない。

古語録谷にも興味はあったが、山菜（草）採
りの夫婦が「狐狸」に見えたり、たかがミニズ
に卒倒したり・・・余程、相性が悪いんだろう・・・
この溪とは・・・

しかし、いつか「茨川」には、紅葉の時期に
でも訪れたいと想っている。

釣竿もたへんかったら・・・大丈夫やろお・・・
アカンやろか？

2006年 10月